

# 人生はフィールドワーク ー文化人類学からのメッセージー

佐野（藤田）眞理子

## 1 はじめに

私は、今年度末で定年退職を迎える。退職とは、人類学者が必ずと言っていいほど研究をしてきた通過儀礼のうちの一つである。つまり、これまで研究対象としてきたものを、私は、当事者として経験するわけである。

退職を控えた 2 年位前から、同僚から退職後の生活についてよく聞かれた。「どこかの私立の大学へ転職するのか?」「辞めたら何をするのか?」（前からやりたかったことをするという答えに対して）、「いや、そうじゃなくて、お仕事は何をするのか?」とか、「趣味に生きるのか?」とか。なぜ、他人の人生にそれほどの関心を抱くのかは不可思議であったが、労働中心主義社会において、有償労働は、個人に対する社会的な認知やアイデンティティと不可分であるためと思われる [中谷・宇田川 2016]。「仕事」は、個人に対して、所属、地位、収入、役割、活動、仲間とコミュニティを与える。人類学者にとっても、大学に属するということは、「人類学者」としてのお墨付きをもらうことである。フィールドワークは、研究活動、業績として評価され、「文化人類学」という授業を教える専門家として認知される。退職とは、長年慣れ親しんできた仕事に付随していた一切のものを失うことであり、退職後の未知なる世界に対して、漠然とした不安を掻き立てるものなのかもしれない。

私もかつてそのように思っていた。退職後の生きがい形成が、私の博士論文のテーマであり、当時は 20 歳代の大学院生として、同じような質問をぶつけていた。アメリカ社会では、「若さ」に価値を置く。アメリカ文化の中核に、「独立」「自立」「**work ethic** 勤労主義」があり、仕事は、人々のアイデンティティと深くかかわっている。1970 年代に主流であった定年退職に対する見方は、個人を産業構造上の位置から解除する社会的メカニズムであり、また、個人を文化の価値体系の枠外に押しやるプロセスとされていた。したがって、高齢者は、定年退職によって失ったものをいかに埋め合わせていくかという点を論じたものが多かった。

私の関心事は、高齢者にとって逆風ともいべきアメリカ文化の中で、人々は、いかにして老後の生きがいを見出していくのだろうかということであった。しかし、実際に私が出会ったのは、メディアが描き出すような打ちひしがれた老人ではなく、生き生きとして、自ら選んだ目的に向かってアクティブに活動する高齢者たちだった。彼らの生きる姿勢がその後の私の文化人類学に与えた影響は計り知れない。

定年退職という人生の岐路に立ち、フィールドワークで出会った人々に思いをさせ、改めて「文化人類学という学問」と「生きる」こととの関係を考えてみた。1) 人類学の特色、人類学的思考とは何か? 2) これまでの人生を振り返って、何が私を人類学にむかわせたのだろうか? 3) 人類学は、自分の生き方にどのような影響を与えたのだろうか? そして、4) 人類学が人々に伝えることができるメッセージとは何か? 本論では、これらの問いかけに向き合ってみたい。

## 2 文化人類学的思考

### 2.1 “Making the strange familiar, and the familiar strange”

アメリカの大学で使われている文化人類学の入門書には、文化人類学的思考の特徴は、“Making the strange familiar, and the familiar strange”であるとよく書かれている。私も1、2年生対象の文化人類学の授業では、この立場をとる。この言葉が意味するところは、異文化でのフィールドワークで遭遇する未知のもの、不可解に思えるものが、その社会の人々の考え方やものの見方について理解度が深まることによって、見慣れたもの、親しみを覚えるものに変わっていくと同時に、自文化で「常識」とされていることも改めて見直すことにつながり、新しい知見が得られるということだ。

授業では、このことをわかりやすく説明するために、私がアメリカの大学院に留学していたころに経験したカルチャーショックを語ることにしている。

インド人の友人ラジャが、インド式のカレーを作ってご馳走をしてくれたときのことだ。その頃、私は、他の院生3人と一緒に一軒の家を借りて共同生活をしていた。ラジャは、私たちの家に朝早くからやってきて、台所で一生懸命カレーを作ってくれた。家中に、さまざまなスパイスの香りが立ち込めていたのを覚えている。

その日、4、5人の友人を招いてハウス・パーティを開いた。さあ、いよいよ食事の時間になった。私たちは、居間に車座になって座った。私の前にカレーのお皿が運ばれてきたとき、私は、フォークやスプーンがないのに気づき、台所へ取りに行った。私が、スプーンでカレーを食べ始めると、なんと、ラジャが飛んできて、いきなり私の手からそのスプーンを力づくでもぎ取るではないか! そして、「これは、インドのカレーなのだから、スプーンを使ってはいけない。手で食べなさい」と、彼は言った。「手で食べるだって」と、私は彼の言葉にかなりの抵抗を覚えた。カレーを手づかみで食べることは、日本の食習慣に慣れている私には、何か、行儀の悪い、不潔なことのように思えた。もちろん、手で食べるということが、インドの習慣だということは知識として知っていた。しかし、ここはアメリカで、しかも、私の家である。スプー

ンやフォークを使って食べるのは当然だろうと、私は、内心かなりむくれていた。初め、彼は冗談で言っているのだと思ったが、私のスプーンを取り上げるときの力強さ、彼の顔の真剣な表情を見ると、カレーを手で食べるということは、ラジャにとってとても大切なことなのだと感じた。

そして、そのことを彼は次のように説明した。

「味わうというのは、舌で感じることだけではない。指の先で食べ物に触れることによって、温度、硬さ、やわらかさがわかる。それは味覚の重要な部分だろう。つまり、口に持っていくまでに味わっているのだ。第一、スプーンなんかで食べたら、舌に触れるのはまず金属の味で、たくさんのスパイスが作り出す複雑な味を損なうではないか。私は、皆においしいカレーを食べてもらおうと、朝から一生懸命作ったのに、あなたのしていることはシェフに対する冒瀆ではないか。」

「冒瀆？」それまで、彼から暴力を受けた私が被害者だと思っていたのが、彼を侮辱した加害者に転換されていたことにも驚いた。しかし、彼の説明は、一理ある。私にも納得のいくものだったし、なぜ、あれほどまでに彼が手で食べることにこだわったのが徐々にではあったが、理解できた。でも、いざ、彼が見本を見せてくれた様に、3本の指を使って食べてみると、動きがぎこちなく、自分の手ではないような不思議な感覚を覚えたものだった。

このエピソードの根底には、文化の違いがあるわけだが、そもそも「文化」とはどのようなことを意味するものなのだろうか。このエピソードを注意深く見ていくことで、文化の特徴について考えてみよう。

まず、このエピソードは、「食べること」についてである。人間にとって生きていく上で「食べる」ことくらい普遍的で、必要不可欠なことはない。では、栄養素を体内に摂取することができれば、人間は満足なのだろうか？ 生物学的に存続するという目的のためならそれでもいいはずである。ところが上記のエピソードから見てわかるように、ラジャも私も「食べ方」にこだわりを持っているのだ。しかも、そのこだわりの内容を見てみると、味覚のあり方、人と人の対応の仕方、ひいては、不浄観、世界観にまで深くかかわっていることがわかる。

ここで、私たち日本人の「食べ方」について考えてみよう。すると、私たちも、箸で食べることに對して、大変な思い入れを持っていることに気がつくだろう。例えば、なぜ、私たちは左手ではなく、右手で箸を持つことにこだわるのだろうか？それも、右手であればどのような持ち方をしてもよいというのではなく、「正しい持ち方」をしなければならぬ。この箸の「正しい持ち方」は、家庭の食卓で親が子供に、あるいは、幼稚園や学校の給食時間に先生が生徒

にたいして、繰り返し、繰り返し教えていくことである。小学校に上がってからも、時折、箸の持ち方を記したプリントが子供たちに与えられることがある。このように日本人が箸にこだわるのは、箸を単に食べるための道具としては見ておらず、それ以上の意味づけをしているからである。箸が正しく使えないと、「みっともない」「行儀が悪い」「しつけがなっていない」と見なされ、使っている人そのものに対する評価にもつながってくる。箸で食べることへのこだわりは、他の食べ方に対する評価にも影響を与える。例えば、手づかみを考えてみよう。おにぎり、サンドイッチ、フライドチキンといったごく一部の食べ物を除いて、それは叱責の対象となる。スプーンやフォークを使ったとしても、それがお椀に盛られたみそ汁や、茶碗のご飯にたいしてであったならば、乳幼児期を省いては望ましいこととは見られない。

結局、上記のエピソードに登場したラジャも、そして私自身も同じ事をしているのだ。つまり、特定の食べ方に、食べるということ以上の意味づけをしているのだ。言い換えれば、食べ方を通して、人々の持つ価値観、評価、人生観、世界観が映し出されているのである。さらに、ラジャの態度に見られるように、この意味づけるという行為には、深い感情が込められている。同様に、私がラジャから手で食べるようにと言われた時に覚えた不快感は、私の中では、「手づかみ」は「行儀の悪い食べ方」と意味づけていたことの結果といえるだろう。このように、「食べる」という同じ現象にたいしても、文化的背景が違っていると意味づけの仕方が違うということがわかる。つまり、お互いに「常識」としていることの中身が違うのである。そのため、異なる「常識」に出会ったときに、お互いに大きなショックを覚えるのだ。なぜならば、今まであたり前として信じてきたことが、突然根底から揺るがされるからである。これが、カルチャーショックと呼ばれるものだ。しかし、そのショックを超えて、お互いを見方を検討すると、相手についても、自分自身についても、今まで見えてこなかったものが徐々に見え始めることに気がつくであろう。

## 2.2 文化とは何か？

これまで「食べること」を例に、「文化」について考えてきた。文化人類学者の間では、「文化」について必ずしも統一的な見解があるわけではない。私がこのような「文化」のとらえ方に至ったのは、二人の人類学者から受けた影響が大きい。一人は、ジェームス・L・ピーコック (James L. Peacock) である。ピーコックは、「文化」を次のように定義している。

「特定の集団のメンバーによって学習され共有された自明でかつきわめて  
影響力のある認識の仕方と規則の体系に対して人類学者が与えた名前」

[ピーコック 1988 : 27]

文化とは、あまりにも自明であるので通常は意識されないものであるが、きわめて強い影響力を持つ。その存在は、異文化（つまり、自らは共有しない認識の仕方と規則の体系）に出会うことによって、初めて、意識されるものである。人類学者が知見を得るのに、フィールドワーク（異文化における長期滞在）を必要とする所以である。

もう一人の人類学者は、クリフォード・ギアーツ（Clifford Geertz）である。ギアーツは、人間を解釈する動物にとらえ、意味と象徴の体系を駆使して物事を解釈せずには生きられない存在であるとする [ギアーツ 1987]。ここでいう象徴とは、どのような対象、行為、事件、性質、関係にも用いられ、概念（意味）の媒介物（vehicle）として働くものである。従って、象徴というのは、一般的に思われている旗、紋章等に限定されるのではなく、何でも、象徴（シンボル）になり得るのである。上記のラジャの例では、「手で食べる」ことも象徴の一例であると言える。

次の言葉は、ギアーツが、「文化体系としての宗教」の中で、宗教について述べた見解だが、それは、そのまま「文化」にもあてはまる。

(1)象徴の体系であり、(2)人間の中に強力な、広くゆきわたった、永続する情調(mood)と動機づけを打ち立てる。(3)それは、一般的な存在の秩序の概念を形成し、(4)そして、これらの概念を事実性(factuality)の層を持っておおい、(5)そのために情調と動機づけが独特な形で現実的であるように見える。

[ギアーツ 1987:150-151]

象徴（意味）の体系は、現実を解釈するモデルになる（model of）と同時に、行動の規範になる（model for）。そこには、強い感情が伴い、強力な真実性を帯びる（真実であると思わせる）のである。象徴は多義的な意味を持ち、蜘蛛の巣のような網の目の意味の体系を成す。

ピーコックや、ギアーツの考えを基に、「文化」の特徴についてまとめてみよう。

- ① 文化とは、人々のものの見方、意味づけの仕方、解釈の仕方のことで、人々の現象の認識の仕方の中に存在するものである。しかし、この意味づけの仕方は人々の行動様式にも深い影響を与えるものである。
- ② 意味づけるという行為は普遍的なものだが、意味づけの仕方には多様性が見られる。それは、人々が依拠している背後にある文化体系（意味と象徴の体系）が異なるためである。
- ③ 意味づけるという行為は、単なる習慣以上のもので、そこには、価値観、評価、選択、感情が伴う。
- ④ 意味づける行為は、普段は無意識のうちに行っていて、異なる意味づけの仕方に出会うことによって初めて自分の意味づけの仕方というものに気がつくというものである。

⑤ 「文化」が日常的な行為の中に見られるように、「異文化」も外国の文化に限定されるものではない。同一文化の中にも意味づけの仕方の多様性は見られる。異文化とは身近なものなのだ。

このように見ていくと、人類学者の仕事とは、P.ラビノーが述べたように、「他者の理解という迂回路を経ることによる自己の理解」であると言える[ラビノー 1980]。つまり、自分の文化、そして、自分自身を理解するためには、他者、異文化というパートナーが必要不可欠なのだ。なぜならば、先述のエピソードで見たように、自分自身がどのような文化的価値観を持っているのかということは、それとは異なる価値観を持つ人と遭遇するまで、気がつかないことだからである。従って、文化人類学の異文化理解は、常に、自分と他者、自文化と異文化を比較することによって初めて見えてくることなのだ。

しかし、ここで注意してほしいことは、「比較」というのはどちらの文化がよりすぐれている、あるいは進んでいるかということを決めることではないということである。ここでいう「比較」とは、ある現象が相手にとってどのような意味があるのか、そして、自分の意味づけの仕方とどこが似ていて、どこが違うのだろうかということを開きかける「対話」のことである。このような「対話」を続けることによって、相手の世界観が、そして、自分自身の世界観の全体像が、徐々に見えてくるのである。

### 3 文化人類学に向かわせたもの

異文化との出会いでは、頻繁にカルチャーショックを経験する。自国では、少なくとも、教養のある人はしないと考えられている言動を、相手が平気ですることがある。また、逆の場合もある。自分が礼を尽くしたつもりでも、相手の怒りを買ってしまうことがある。同じ現象でも、文化的背景が違えば、違って見える。しかし、この衝突があるからこそ、文化的違和感から見えてくるものがある。

これまでの私の人生を振り返ると、様々な異文化との出会いとカルチャーショックがあった。それらの経験を通して文化人類学という学問に興味を持ったのだと思う。いくつかの経験を文化人類学的思考から振り返ってみよう。

#### 3.1 グアテマラでの経験

私は、いわゆる「帰国子女」のはしり、つまり、そのような言葉が一般に使われる以前に、親の国外勤務のために学校教育を海外で受けた。乳幼児期に2年半暮らしたメキシコを省いて、最初の強烈な異文化体験であったのは、中学2年生から3年半暮らした中米のグアテマラだった。当時日本は、高度成長期の真っただ中、戦後復興を遂げ、経済大国を目指して大躍進中で

あった。その一方で、グアテマラのような国を、「後進国」「低開発国」（当時は、「開発途上国」という言葉は使われていなかった）と呼び、見下す風潮があった。しかし、実際のグアテマラはコロニアル風の建築物と先住民文化が共存する風光明媚な国だった。

この時期、私に大きな影響を与えたのは、母の異文化に対する態度であった。ブーゲンビリアの咲き乱れる白亜の教会を指さしながら、「日本では、遅れているって見下すけれど、こんなに立派で、美しい建物があるでしょう。その国のことをよく知らなければ」と言っていた。母は、スペイン語を習い、土地の市場に出かけ、ローカル・フードを好み、何よりも先住民の手織物をこよなく愛していた。もし、彼女の態度が逆で、異文化を拒絶するようであったならば、私は、文化人類学に興味を持つことはなかったかもしれない。

グアテマラでのもう一つの経験は、ギアーツのいう象徴の意味を身近に感じたことである。私の父は、外交官であった。当時は、政情が不安定で、反政府勢力による外交官をターゲットにしたテロが横行していた時期だった。父の在任中にドイツ大使が誘拐され、地方の山中で、遺体で発見された。アメリカ大使は、公邸の前で、射殺された。次は、日本大使の番だというのがもっぱらの噂で、私が学校に行くのにもしばらく護衛がついていた。この状況の理不尽さを文化人類学的に解釈すれば、外交官とその家族は、まさに、国家（日本）を象徴するものであり、自国政府（グアテマラ）に対する人質という道具なのである。これは、外交官その人が、どのような経歴・思想・性格を持っているか、つまり、個人としての資質は全く関係ないのである。後に、ギアーツの解釈人類学を学び、象徴の持つ力について考えるとき、私は、グアテマラで経験した恐怖、不安、怒りをよく思い起こしていた。

平時においても、私の一挙一動によって、「日本」が評価される。子供心にも、背負った国家の重みをいつも感じていた。ずっと後になって、アメリカの大学院に留学した時、外交官パスポートではなく、一般のパスポートを所持した時、「ああ、これで一個人としてふるまえる」と至極解放された気分になった。

### 3.2 大学時代

その後、ノルウェー、スイスでの滞在を経て、国際基督教大学に進学した。当時の日本では、外国で取得した資格で受験でき、9月に入学できるほぼ唯一の大学であった。授業は、日本語か英語で提供され、卒業単位を揃えるには、両方の言語が必要であった。学生は、4月入学の日本人学生、9月入学の留学生と海外から帰国した日本人学生が、ほぼ同数在籍していて、それぞれに名称がついていた。順番に、「純ジャパ」「ノンジャパ」、そして、私のような帰国生は、「変ジャパ」と呼ばれていた。「えっ、私って変なの?!」まさに、青天の霹靂だった。海外にいる時は、日本の代表と自他ともに思っていたのに、日本に帰ってくると、日本でずっと育って

いないから純粹の日本人ではない、しかし、外国人ではないから日本人ではあるが、「変な日本人」というわけである。そして、ことあるごとに、「日本ではそういう言い方しないわよ。やっぱり、変ジャパね」とか、「ディスカッションの時、堂々と意見を言うのね、さすが変ジャパ！」とからかわれた。

ここに象徴のもつもう一つの側面、すなわち、多義性がみられる。つまり、同じ象徴でも、見る人の立場とコンテキストによって、意味が異なるということだ。そして、グアテマラの例でも、日本の例でも、対象となっている私自身は何も変わっていないのである。私に対する見方の違いは、見る人が依拠している文化的体系と解釈の仕方によるものである。

### 3.3 大学院時代

同じ現象でも、違って見えるという文化人類学的思考パターンの緊張感と面白さに気付かされたのは、アメリカで過ごした大学院時代だった。アメリカは多民族・多文化社会である。同質性を好む日本社会と対照的に、多様性そのものが価値を持つ社会である。例えば、パーティや食事会でも、専門分野が異なる人々を集めるのが普通のことだ。そこで、まず、聞かれるのは、「あなたはどんな研究をしているの？」それに、さっと答えられないと、つまらない人、怠け者の院生・研究者とみられてしまう。つまり、日本人の院生なら自己紹介の時に真っ先に言う、所属、肩書ではなく、その人の考え、意見が重要視されるのである。このような時に備えて、指導教員には、1分、3分、5分のスピーチを常々用意しておくように、それも、自分の専門分野以外の人にわかるように伝えられるようにとよく言われたものだった。

このような異分野間のコミュニケーションは、最初は、頭痛がガンガンして緊張したが、相手は往々にして、「それは面白いね。私の分野でもこういう研究があるけれど、それと似ているね。こういう点はどう思う？」と、今まで全く別物と思っていた事柄と接点が見いだせ、話しているうちに、話題がどんどん展開して行って、家に戻ってくるころには、アイデアがたくさん浮かんできて、とても得をした気分になった。

相手の常識は、こちらの非常識。日本人の女性研究者として幸運だったと思ったのは、誰も、「結婚」か「研究（仕事）」か、といった選択を迫らなかつたことである。「それは、別次元の問題でしょう。なぜ、どちらかを選ばなければならないの？」と、全く、意味が分からないといった様相だった。今でこそ、日本でもイクメンと評価されるようになったが、アメリカでは、当時でも、男性が家事・育児を手伝うのは当たり前、しないとひんしゆくを買った。だから、我が家では、配偶者とは、家事・育児、そしてもちろん家計の負担もきっちり半分半分というポリシーをお互いにずっと貫いている。日本で出会って、結婚していたら、こうはいかなかったかもしれない。



異文化との出会いは、時には、衝突も招くが、自分が今まで、常識と思って拘束されていた事柄を見直し、新たな見方、行動の仕方につながるのである。

### 3.4 全盲の学生 A さんとの出会い

見え方が違って、コミュニケーションは図れる、お互いを理解するきっかけになるということ学んだのは、生まれつき全盲の学生 A さんとの出会いだった。私は、本務校で 10 数年にわたって、障害のある学生の支援に携わってきた。私にとっては、A さんが深くかかわった最初の障害学生だった。

ある時、一緒に歩いていて、夕焼けで真っ赤に染まった空を見て、私は思わず、「わあ、きれい！燃えるような夕焼け、見て！明日は、きっと良いお天気よ」と言ってしまった後、「あ、ごめん」と謝った。すると、A さんは、

なぜ、謝るの？私が見えないから？私が想像している夕焼けは、先生が見ている夕焼けと違うかもしれない。違っていてもいいじゃない。私は、先生の感激している声から、夕焼けを想像できるし、何よりもその感動を共有できる。それこそが大事なことじゃないの？一番寂しくなるのは、皆が見えないことに気を使って、何も話をしてくれないことだ。

A さんの言葉はまさに目から鱗が落ちるようだった。異文化が出合い、衝突することがあっても、それを避けるのではなく、お互いの見方・考え方・感情を伝えることが大事である。そこから、相互理解が始まるのだ。

## 4 解釈する動物：人々のレジリエンス（たくましさ、しなやかさ）

### 4.1 人類学者の解釈の変化

人類学者は、フィールドワークで様々な出会いを経験し、関係性を構築する。そこで学んだこと、話し合った内容は、人類学者がフィールドを離れた後でも、何十年立った後でも、人類学者の心の中に生き続けるものである。そして、その意味を折に触れて、何回も、何回も解釈し、再解釈することを繰り返す。人類学者のフィールドノートの解釈のプロセスの中で、インフォーマントと人類学者の関係は、いわば、写真（静止画）とムービー（動画）のような関係になる。時が立っても、人類学者の思い出の中のインフォーマントは、フィールドワーク当時のままで、年を取らない。しかし、解釈する側の人類学者は、いくつかのライフステージを経ることによって、同じフィールドノートに対しても、見方、感じ方や、言葉の背後にあるものに対する気づきが変わってくる。

例えば、私が博士論文のためのフィールドワークをしていたのは、20 代の大学院生だった。

70 代後半の女性が、運転免許が更新できるかどうかということをとっても心配をしていた。「夜運転するとき、周りが良く見えないの。更新できなかつたらどうしよう」という言葉に対して、当時の私は、「更新されなかつたら、用事がある時は、息子か娘に頼めばいいのに。その方が、事故を起こさなくて済むから、安全じゃない」と気軽に考え、なぜ彼女が運転にそれほどこだわるのかわかっていなかったと思う。時が流れ、自分自身が高齢者の仲間入りをする頃になって、彼女の言葉を思い出すと、その背後にある心身の衰え、反射力の低下、事故への不安と同時に、人に頼むことの煩わしさ、自分が行きたいところに行けないもどかしさに共感を覚えるようになった。

#### 4.2 アメリカ人高齢者の退職後の生きがい

そこで、改めて、博士課程やその後のポストドク時代のフィールドワークを振り返って、アメリカ人高齢者の退職後の生き方を考えてみよう。現在は、強制的定年制度は撤廃されているが、1970 年代末-1980 年代前半にフィールドワークを行っていた頃のアメリカは、まだ、定年退職制度があった。定年後もアクティブに暮らすことが提唱されていた。日本でも昨今、「生涯現役」や、アクティブ・シニア・ライフが提唱されているが、当時のアメリカと状況が似ている。

アメリカ人高齢者も日本人高齢者も老後に直面する問題には類似点が多い。どちらの国でも、少子高齢化による高齢者人口が増加し、また、医療技術の発達によって寿命が延びているが、疾病の治療や介護に係る社会的負担の増加も懸念されている。定年退職後の期間が 20-30 年に及ぶ中、定年退職後の生きがいの追求や、新たな社会参加の場とネットワーク作りが重要な課題となっている。

高齢者の自立と社会参加を促進するために、日本でも、アメリカでも、高齢者センターや、老人憩いの家といった名称で呼ばれる、高齢者向けの日中のみ利用する公民館のような公共施設が、1970-80 年代に地域社会に作られ、高齢者向けプログラムやサービスを提供している。アメリカの高齢者センターでは、各種福祉手当の手続き、介護施設やサービスの紹介を行っているところも多い。工芸や手芸を中心とした教養講座、レクリエーション、送迎サービス等、高齢者向けプログラムには、両社会での類似点が多い。

提供されるサービスで大きな相違点は、アメリカの高齢者センターでは、必ずと言っていいほど、恒常的な昼食（給食）プログラムがある。このプログラムは、アメリカ高齢者法による措置で、全米で行われている。注目すべき点は、食事代として定められた金額はなく、利用者は、寄付という形で、任意の金額を支払う。食堂の入口で小さな封筒を渡され、そこに各自が適当と思う金額を入れるのである。これは、収入の額にかかわらず、誰でも一日一回は、栄養

のバランスがとれた、温かい食事をすることができるようにという配慮のもとに作られた制度である。私がポストドク時代に調査を行っていた米国中西部の小都市にある高齢者センターでは、月曜日～金曜日の週5日間、昼食プログラムが提供されていた。センターに来られない人々には、宅配食という形で、家に届けるサービスがある。私を知る限り、日本の高齢者センターではこのような恒常的な食事サービスは見受けられない。しかし、任意で行っている活動はある。私が調査をした東京近郊の町では、中年の主婦ボランティアによる地域の高齢者のための食事会が行われているが、これは、月に1回である。

このように行っている活動には、類似点が多く見られるが、一番大きな違いは、アメリカ人高齢者と日本人高齢者が、高齢者センターをどのような場所ととらえ、また、そこに通う理由をどのように説明するのかといった彼らの語り方にある。まず、アメリカ人高齢者は、高齢者センターに行くことを、「働きに行く」「仕事をしに行く」、しかも、「頻繁に行くところ」、つまり、日常の活動場所として語る。一方、日本人高齢者は、「おしゃべりをしに行く」「遊びに行く」「暇つぶしに行く」所で、毎日ではなく、「たまにいく所」といった非日常の空間として表現する。

では、提供されているプログラムやサービスにさほど違いがないのに、なぜ、アメリカ人高齢者と日本人高齢者では、このように語り方に差があるのでしょうか？ 特に、アメリカ人高齢者が、なぜ、働く（work）という言葉が頻繁に使うのだろうか？

アメリカの高齢者センターで最も印象的なのは、ボランティアの数が非常に多く、その全員が高齢者自身であることである。センターの受け付けも、センター内を案内してくれるホステスも、クラフトショップの売り子さんもといった具合である。常勤の若い職員ももちろんいるが、彼らは奥まったところにある事務所で働いていたりして、目立たない。先述の昼食プログラムも高齢者ボランティアによって支えられている。調査地のセンターでは、町の高等学校の給食センターから食事を運んでくるので、調理自体はしない。しかし、高齢者ボランティアは、テーブルのセッティング、配膳、食器洗い、片付けなど、すべての作業をこなす。宅配食のパッキングも、トラックでの配達もすべて高齢者ボランティアが行う。彼らの多くは、「月曜日と木曜日は、食べに来るだけ。火曜、水曜、金曜は、キッチンで働くの」というように、ある時は、利用客、ある時は、ボランティアとして活動している。世話をする側でもあり、される側でもある。つまり、高齢者センターは多様な高齢者にとって、「働く場」なのだ。

この高齢者の役割は、先述の東京近郊で行われている食事会の模様と比較すると違いが明らかになる。中年の主婦層のボランティア8名が、献立の決定、買い出し、調理、配膳、食器洗い、片づけをすべてこなす。その間、25名近い高齢者の参加者は、食卓について、ずっとおしゃべりを楽しむ「お客様」である。全員が自分で集会所まで歩いてくることのできる健康な人

たちだが、例えば、片づけを手伝ったりすることはない。中年の主婦ボランティアは、世話をする側、高齢者は、世話をされる側といった、明確な役割分担がなされていて、逆転することはない。

アメリカ人高齢者が仕事（work）とみなして従事する活動だが、その内容は個人個人で違っている。上記のボランティアとして従事する様々な事柄も含まれるが、ある人にとっては、高齢者センターに出かけること自体が仕事である。ここで興味深いのは、陶芸のように一般的には趣味とされているもの、あるいは、トランプのように遊びとされている活動に従事することも、当事者は work と呼ぶ。Work は、公共の場で行われるとは限らない。ある人は、小説を書くことが今の自分の work であると言っていた。

内容はさまざまであるが、アメリカ人高齢者に共通しているのは、それらの work に従事するときの基本姿勢であり、それは、退職前の「仕事」がモデルになっているということである。彼らは、work に付随する必要条件を、次のように語る。

- (1) 老後の生活は、毎日、活動的に暮らすことが大事。
- (2) 何をやるにしても、強い意志と覚悟をもって臨むこと。
- (3) 人生の目的になるようにすること。
- (4) 取り組む時は、毎日、きちんとしたスケジュールを立てて、臨むこと。
- (5) 責任感を持って臨むこと。
- (6) 人の役に立つようにすること。

ここに見られるのは、work の内容を規定しているのは、社会的通念ではなく、高齢者自らが自分のために選んだものであることである。選んだものに対して、成功させるという強い意志と覚悟を持って、持続的に努力する姿勢である。

本稿の冒頭で、1970年代に主流であった定年退職に対する見方は、個人を産業構造上の位置から解除する社会的メカニズムであり、また、個人を文化の価値体系の枠外に押しやるプロセスとされていたと述べた。高齢者は、定年退職によって失ったものをいかに埋め合わせていくかという躍起になっているとも論じられていた。しかし、実際のアメリカ人高齢者の退職後の過ごし方を見てみると、失ったものを埋め合わせようといった消極的な生き方ではなく、新しい環境で、自ら選んだものに意義を見出し、能動的に関わる姿がある。確かに、彼らの多くが行っている活動は、無報酬で、肩書きも高齢者社会の中でのみ認知されるものである。しかし、アメリカ文化の中核とされる「独立」「自立」「work ethic 勤労主義」といった価値観は、健在であり、生き方を支えている。彼らが行っているのは、退職後の新しい環境で、仕事(work)とそこにつながる象徴群を再定義し、退職前の仕事をモデルとしながら新たな生きがいを見出すことである。ここに見られるのは、人々の持つレジリエンスである。

## 5 文化人類学からのメッセージ

2017年3月に行われた大阪大学の卒業式での文学部長のスピーチが話題になった。「文学部は何の役に立つの？」という世間一般によくあるとされる問いかけに対して、「文学部の学問が本領を発揮するのは、人生の岐路に立ったとき」と答えたとされる<sup>1</sup>。同様の問いかけを文化人類学にしてみよう。文化人類学、あるいは、文化人類学的思考は何の役に立つのだろうか？この問いかけに対する答えは、個々の文化人類学者によって異なるだろうが、私は、次の3点を挙げたい。

第1は、前項で見た人間の持つレジリエンスについてである。ギアーツの言うように、人間は解釈する動物である。人はすべてのことに対して意味づけを行い、意味を問い続けている。そのことは、平時においてはもちろんのこと、新しい環境においても、また、危機的な状況に直面しても、意味と象徴の体系を駆使して、物事を解釈し、再定義しながら新たな意味を見出していく力を持つものである。民族誌を通して、人類学者は人間の持つレジリエンスの力を描き出してきた。その姿を知ることは、私たちに勇気を与えてくれるものである。

第2は、比較文化の視点、すなわち、同じ現象でも文化的背景が違っていると見え方が違うということである。類似した課題に対する人間の対応の仕方の多様性を知ることは、当たり前だと思っていたこと、あるいは、これしかないと思い込んでいた対応の仕方を再検討する視点をもたらしてくれる。私たちが知らず知らずのうちに身につけてきた自文化中心主義からの開放を可能にしてくれる。

第3は、最初に書いた文化人類学的思考は、フィールドワーク中のみならず、私たちの日常の人間関係にも応用できるということだ。異文化というのは決して遠い外国の話ではなく、私たちの周りにいくらでも存在することである。たとえば、医学的知識を持った医者と、実際に痛みを覚え、苦しんでいる患者とでは、「病気」に対する見方は同じではないだろう。教師と学生の「学習」に対する見方はどうだろうか？親と子ではどうだろうか。まさに、お互いに異文化なのである。だから、時には、衝突することもあり得る。その時、権威を持ったもの、専門的知識とトレーニングを受けたものの見方が絶対に正しいとするならば、これは、一種の自文化中心主義の押しつけともいえるだろう。逆に、「相手の立場から見ると、どう見えるのだろうか」と問いかけると、そこから新たな展望が開け、相互理解に結びつく可能性が出てくる。

ここでいうのは、相手に対して思いやりを持つという単なる精神論ではない。相手にとって

---

<sup>1</sup> With News

<https://withnews.jp/article/f0170724005qq0000000000000000W00o10101qq000015619A>

の意義、こだわり、価値観を理解するように努力すること、そして、同時に、自分にとっての意義、こだわりを自分自身に問いただす努力をすることだ。ちょうど、人類学者がフィールドワークを行うようにである。このように、日常生活においても、異文化間の対話を行うことによって、相手を認め、そして自分を認めるということに段々と近づくことができるだろう。

私は、多様性を認めることのできる社会は、真に豊かな社会だと思う。そして、その第一歩は、異文化を知ろうと努力することから始まるのではないだろうか。

#### 参考文献

藤田 真理子

- 1988 「象徴の連続性と生活秩序の再定義—米国カリフォルニア州白人の定年退職者の事例から—」『民族学研究』53巻、1号、58-85頁
- 1999 『アメリカ人の老後と生きがい形成：高齢者の文化人類学的研究』大学教育出版

Fujita-Sano, Mariko

- 2009 “Well-being in a Super Aging Society” (in Anthropology of Life Design and Well-being), *Minpaku Anthropology Newsletter* (National Museum of Ethnology), No.29, 6-8,
- 2014 Changes and Continuity in the Well-being of American Elderly People and Roles of Senior Centers, *Senri Ethnological Studies (SES)*, Vol.87.
- 2016 The Role of Meals for the Well-beings of Japanese and American Elderly: *Bulletin of The National Museum of Ethnology*, Vol.40(3)

Fujita-Sano, Mariko & Toshiyuki Sano

- 2001 *Life in Riverfront: A Middle-Western Town Seen Through Japanese Eyes (in Case Studies in Cultural Anthropology)*.

ギアーツ、クリフォード

- 1987 『文化の解釈学 I』（吉田悌吾他訳）岩波現代選書（Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures*, 1973）

中谷文美・宇田川妙子

- 2016 『仕事の人類学：労働中心主義の向こうへ』世界思想社

ピーコック、ジェームス L.

1993 『人類学と人類学者』（今福龍太訳）岩波書店（James L. Peacock、*The Anthropological Lens: Harsh Light, Soft Focus*, 1986）

ラビノー、ポール

1980 『異文化の理解—モロッコのフィールドワークから』（井上 順孝訳）岩波現代選書（Paul Rabinow、*Reflections on fieldwork in Morocco*, 1980）